

OPEN SESAME

鳥取城北高校AL・授業改革委員会通信「オープンセサミ」

第11号

2015年10月5日発行

【講義形式授業】と【AL型授業】とは対極にあるもの！？

「講義形式と比べAL型授業は教師が教えないから理解が深まらないし、大事なことが伝わらない」、「AL型授業ばかり受けた生徒は一人で勉強できなくなる」、「ずっと講義形式でやってきた自分には、AL型授業はハードルが高く感じる」…などなど、AL型授業に関して不安の声を多く聞きます。例えばここに挙げた不安の根本には、講義形式授業とAL型授業とは、両極端に対立するものという捉え方が潜んでいる気がします。果たして そのなのでしょうか？小林昭文先生、成田秀雄先生の著書『今日から始めるアクティブラーニング』（学事出版）に以下のようなことが書かれていましたので、ご紹介いたします。

京都大学の溝上先生は著書『アクティブラーニングと教授学習法パラダイムの転換』（東信堂）の中で、「アクティブラーニングとは教授学習法パラダイムの転換である」と述べています。これを一言で言うと、「**ティーチングからラーニングへ**」ということになります。ティーチングとは教員が「教える」という意味で、教員が学習者に対して一方的に知識を伝達することを指しています。一方、ラーニングは「学ぶ」という意味で、学習者が何を学んでどういうことができるようになったのかというプロセスを重視する立場に変わっていくということを意味しており、ある意味、当たり前のことかもしれません。

ここで注意が必要なのですが、「**ティーチング**」と「**レクチャー（講義）**」を混同してはいけません。ティーチングからラーニングへ転換を図るといつても、**教員が何も教えないのではなく、レクチャー（講義）などを通して知識を伝達することは無なりません**。アクティブラーニングに講義は不要だという誤解は、ティーチングとレクチャーとを混同している点に起因しています。

また、**アクティブラーニングは生徒がやることです**。それに対して**教員の側は、アクティブラーニング型授業を提供することになります**。

以上のこと踏まえて、もう一度アクティブラーニング、アクティブラーニング型授業の定義を確認しましょう。

【アクティブラーニング】一方的な知識伝達型講義を聞くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。

※つまり、どんなに面白い講義でも生徒が黙って聞くだけではアクティブラーニングは起きない！

【アクティブラーニング型授業】学習者にアクティブラーニングが起きることを含む全ての授業形式。
※つまり、今まで自分がやっていた授業はAL型授業なのでは！？

今回のまとめとして、本校は「アクティブラーニング」という概念で今までの実践を捉え直し、今までの実践を否定するのではなく、「再」発見しようというスタンスでよいのではないかということを提案します。

不安からのスタート。勇気を持って実践！

今年度、AL強化選手教員になった英語科の田栗早敏先生の実践報告です。実践に至るまでの田栗先生の悩みや、どう乗り越えたかまで語っていただきました。ぜひご一読ください！田栗先生ありがとうございました！

■授業での悩み

生徒を集中させられない、上手く説明ができない、時間を持て余す…数え上げればきりがありませんが、一言に集約すると、「なぜ、自分はこんなにも授業が下手なのだろう？」という点に尽きます。本誌のタイトルにあるように、「もっといい授業がしたい」けれども、そもそも「いい授業」とは何であるかも分からず、という日々を繰り返す日々で、未だに明確な答えを得ているとは言えないのが現状です。

■AL型授業の実践を通して

そんな状態ですので、四月に強化選手教員にして頂いた際も、「ALって何だろう？」という地点からのスタートでした。不安で仕方のない日々が続く中で、本誌でも度々紹介されている小林昭文先生の著書に次のような記述を見つけたとき、少し気持ちが楽になったように感じました。以下にご紹介したいと思います。

私がみなさんに強く伝えたいことはAL型授業をそれほど恐れることはないということです。定義に沿って考えれば、みなさんがこれまでにやってきた授業なのです。

これから生徒にアクティブラーニングが起きる時間を少しずつ増やしていくことが、私たちが目指すべきことなのです。

小林昭文 著『アクティブラーニング入門』p.19より

つまり、アクティブラーニング型授業という授業を「一から作り上げる」のではなく、今の授業に少しずつアクティブラーニングが起きる「時間を増やす」という考え方ができる。この点に大きな違いがあるように感じました。



田栗早敏先生

○英語科AL強化選手教員
○教員歴5年目
○F2-3担任

■実践報告

上記の提言に勇気をもらい、現在取り組んでいる改善点は大きく分けて以下の二点です。

- ① 板書・説明の時間を極力減らす。
- ② クラス全員に一度は発表の機会を設ける。

そしてその前段階として、「一つの授業に最低二時間」を目標に事前の準備や教材作成を行っています。少しでも内容を効率よく整理することで上記の①を達成できれば、②を行う時間のゆとりが生まれ、さらに②が定着すれば、そこからグループでの話し合いやプレゼンテーションといった活動へつなげることが可能ではないか…。このような思いで、一分でも一秒でも、小林先生が述べられるような「アクティブラーニングが起きる時間」を作れないかと、日々模索しています。一学期・二学期と行った研究授業では、英語科の先生方をはじめ、多くの先生方に温かい言葉を頂き、大変励みになりました。この場を借りて、お礼を申し上げたいと思います。引き続き三学期も頑張ります！！